

Oncology News

脾辺縁帯リンパ腫の生存アウトカムを長期解析／Cancer

まれな腫瘍で一定の治療法がない脾辺縁帯リンパ腫（SMZL）について、過去 17 年間の患者の生存アウトカムを解析した知見が示された。米国・マイアミ大学の Jorge A. Florindez 氏らによる米国の大規模な集団ベースの解析で、治療戦略によって全生存（OS）期間または SMZL 特異的生存期間に、有意差は認められなかったという。また、高齢、ヒスパニック系、びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫（DLBCL）形質転換および B 症状を有することが予後不良因子として示された。Cancer 誌オンライン版 2020 年 8 月 7 日号掲載の報告。

研究グループは、SEER（Surveillance, Epidemiology, and End Results）データベースを用い、1999～2016 年の間に SMZL と診断された患者を特定し、経過観察、脾臓摘出術、化学療法、および脾臓摘出術＋化学療法の各治療戦略について評価した。

OS および SMZL 特異的生存について、それぞれ Cox 回帰モデル、Fine and Gray 回帰モデルを用いて解析した。

主な結果は以下のとおり。

- ・解析対象は 1,671 例で、大部分の患者は、>60 歳（71.3%）、白人（89.7%）、非ヒスパニック系（91.7%）であった。
- ・DLBCL への形質転換は 71 例（4.2%）に認められ、10 年転換率は 8.6%（95%信頼区間[CI]：6.6～10.9）であった。
- ・多変量解析の結果、SMZL 特異的生存期間の短縮は、60 歳以上（部分分布ハザード比[SHR]：1.85、95%CI：1.40～2.45、 $p<0.001$ ）、ヒスパニック系（SHR：1.50、95%CI：1.06～2.13、 $p=0.023$ ）、DLBCL 形質転換（SHR：2.10、95%CI：1.48～2.97、 $p<0.001$ ）、および B 症状の存在（SHR：1.67、95%CI：1.23～2.27、 $P<0.001$ ）と関連していた。
- ・脾臓摘出術との比較において、経過観察（SHR：0.92、95%CI：0.67～1.28、 $p=0.636$ ）、化学療法のみ（SHR：1.28、95%CI：0.93～1.76、 $P=0.127$ ）、および脾臓摘出術＋化学療法（SHR：1.43、95%CI：0.96～2.13、 $p=0.089$ ）のいずれも、SMZL 特異的生存期間に有意差は認められなかった。
- ・OS 期間短縮の予測因子は、60 歳以上（ハザード比[HR]：2.98、95%CI：2.37～3.76、 $p<0.001$ ）および B 症状の存在（HR：1.33、95%CI：1.06～1.67、 $p=0.014$ ）であった。

<関連文献>

Florindez JA, et al. Cancer. 2020 Aug 7. [Epub ahead of print]

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/32767702/>

当コンテンツは、株式会社ケアネットの監修により、がんに関連する重要論文を選別し、それらを簡潔に要約したニュースレターです。当社の見解を述べるものではなく、承認外使用を推奨するものではありません。内容の詳細については元文献・元ニュースを、製品に関する情報は各製品の最新の添付文書をご確認いただきますようお願いいたします。

尚、当コンテンツに掲載されている記事等に係る所有権、著作権その他一切の権利は、ニプロ株式会社、株式会社ケアネット、コンテンツ制作者等の著作権者が保有しています。